

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

61年11月現在 会員数
返子地区 172名
葉山地地区 287名
大船地区 62名
(合計) (521名)

61年11月号 (172号)
発行 者 萃
根岸 岳
編集 者 岳
中村 愛

詩吟と私

逗子A 中山俊江

主人と詩吟を始めて二年になり今思うことは、詩吟の上手、下手を問うより、同じ所に集り者どうし、心と心の交流が今の私にはすばらしいことです。十人十色、人は顔も違えば、考え方も違う。その中で皆が一つになっっているって思えてくるのです。よい先生と仲間をえた私は、今度から少しだけでをあげたいと思います。

晩鐘二題

守谷崇岳

(ミレーの晩鐘)

夕陽はまさに地平線上に没しようとしている。その時遙か彼方、エンジェルスの教会の塔より、夕べを告げる鐘の音が広野にひびき渡る。

一日の農作業を終えた農夫とその妻は、大地にひざまずき、今日も無事に働らけた伴せを想い、心より敬虔な祈りを捧げる姿。なんと平和な情景であろう。

この晩鐘を見る時、限らない感動と共に詩的情緒が忽然と湧くを禁じ得ない。常に

黙々と額に汗して働く農民へ深い同情をもつて、その姿を画きつづけたミレーの人柄にも感銘を受ける。

(晩鐘・松口月城)

暮鐘幾点山寺の辺

之を聞き誰か想い肅然たらざる

観じ来れば人生一夢の中

名利畢竟雲煙に似たり

愧我煩惱解脱し難し

只願う大悲無量の縁

余韻嫋嫋溪谷を渡る

帰鳥友を呼ぶ西方の天

この詩を詠じていると、おのずから静寂な山寺の夕べの佇いが彷彿と臉に浮ぶ。余韻嫋嫋諸行無常と告げ渡る夕べの鐘の音を聞けば、おのずから無限の世界に有限の生を受け、人間の弱さ、はかなさをも、しみじみと感ずるのである。名利畢竟雲煙に似たり。喜びも、悲しみも、又祈りも、人それぞれの想いをいだいて聞くであろう夕べの鐘の音も、四辺に静かに、夕ぐれと共に消えて行く情景を想いつゝ詠する時、之亦深い感動をおぼえるのである。片や絵により詩情をおぼえ、片や詩篇により絵に情景を描くとき、洋の東西はあれど、本質的にその心は相通じたものと思うのである。

62年度

高段者

審査課題講座について

- ◇七段 11/23(日) …… 9時 …… 9 30分 …… 12 30分
(日時) (受付) (開講) (終了)
 - ◇八段 " …… 12 30分 …… 13 20分 …… 17時
 - ◇皆伝 11/24(月) …… 9時 …… 9 30分 …… 17時
 - ◇以上
- 会場は平塚農業会館(各段位共)
受講料は千円(当日受付へ納入)
審査課題テキスト及必要教本持参
吟道手帳持参・受付に提出
昼食は各自持参

◎ 行事予定

- ◇ 傾心会 十一月二十六日(水) 桜山下会館
 - ◇ 指導者講習会
 - ◇ 県本部 十一月二十九日(土) 廻子図書館ホール
最終理事会(納吟会)
 - ◇ 傾心会 十二月十四日(日) 廻子図書館ホール
廻子地区温習会
- 奥伝合格 (十月一日付)**
- 左記の方々が合格されました。おめでとろございます。
- 194 加藤修風
 - 201 森 泰風
 - 204 土屋純風
 - 207 高橋勢風
 - 209 角田覚風

梁甫吟

去る十月十二日県本部主催の指導者講習会の折、師範の審査課題の一つ「登楼」を指導されました。その登楼の文中にある、孔明が常に吟じていたという「梁甫吟」なるものをままとめてみることにしました。

梁甫吟 諸葛孔明(181~234)

歩して齊の城門を出て

遙かに望む蕩陰里

里中に三墓有り

衆衆として正に相似たり

問う是れ誰が家の塚ぞと

田疆古治氏

力は能く南山を排し

文は能く地紀を絶つ

一朝讒言を被りて

二桃三士を殺す

誰か能く此の謀を為せる

国相齊の晏子なり

(大意) 歩いて齊の城門の外に出て、はるかに蕩陰里の里を眺めると、そこに三個の塚が見える。塚は並んでいてよく似ている。これは誰の墓かと問うと齊の臣であった公孫接・田開疆・古治子の墓であると。その昔彼らは、力は南山をも動かすほどであっ

たし、学徳は天地をも動かす程であった。然し思いがけなくも讒言を被って、二個の桃を与えられて、それぞれ自刃して果ててしまった。一体この謀をなしたのは誰であろう。齊の宰相晏平仲である。彼は勝れた人物ではあったが策略によって三士を自殺せしめたのは狭量を物語るものである。それに引きかえて三士の死は惜しむべきことであった。

(語釈) 齊城門 山東省臨沂県は昔齊の都であった。その城門。蕩陰里 齊城の近くの村の名。三墓 公孫接・田開疆・古治子の三人の墓。衆衆 連なつて並んでいるさま。文 学徳、人格。地紀 天をさへえている杖。一朝 いったん、思いがけない時。讒言 春秋の齊の宰相晏平仲が、公孫接、田開疆、古治子の三子が自分に対して起つて礼をしなかつたことを意に含んで陥れて死に至らしめた其の行為をいう。

(参考) 安祿山の乱に捕えられた杜甫は、救い出されて其の後官を辞し、家族と共に四川省成都に至り、しばしやすらぎの生活を送っていた。そんな春の一日、草堂近くの楼に登り、蜀相諸葛孔明の偉業を偲んで作ったのが「登楼」である。(愛岳)

カナダ行

根岸 岳 萃

孫を見に来いと息子から航空券を送ってきたので、カナダ、バンクーバーへ三週間行ってきました。空港へ、市中心街へ、車で共に三十分位、タクシーはあまり見ず、又流してないので、いきおい日曜とか、息子が仕事から帰ってから、公園やスーパーに行く程度で、観光とは程遠く、お蔭でこちらで読みかけの吉川英治の三国志を、帰国までにすっかり読んでしまった。

しかしカナダ滞在中、小鳥の囀りも（鳥と椋鳥は大分いたが）蟬の声も終に一回も聞かなかつた。温度も、二、三日30度になったほかは約21度位、長袖のジャンパーを離すことなしの日々でした。緯度はサハリン位、夏季はデイトムが長く、サマータイムを実施しているので、十時半頃迄明るく、仕事から帰ってからも結構余暇がある。

どうせカナダ迄来たのだからと万博のため作った高架電車に乗って一日、開催中の万博に出かけた。その日は二、三日あった30度の日でしたが、湿度が少ないせいとか、日蔭に入るとサーッと涼しい。

野菜、果物、肉類等は非常に安く、特別

食等ぜいたくをしない限り、生活はし易いようです。道路は広く、車も少ないのか、交通渋滞はついに見ませんでした。

蟬も鳴かずボブラ並木は秋の気配
北方の蝶花に遊ぶも力なく
エキスポの万国旗灼け異国臭
雲の峯の形成つぎつぎ故郷遠し

亡き母を憶う

中 村 愛 岳

私は葉山町の教育委員会の依頼で、毎年一回「葉山町高齢者学級」で詩吟、詩舞の部を担当して参りました。

それは昭和55年度のことでした。その日も多勢の老人の方々が、早々と集まってこられ、まず最初にいつも通り、力いっぱい

五十六花なら蓄
七十八働き盛り
九十になって迎えがきたら
百迄待てと追い返す

を詩吟調で合吟していただきました。そのあとで私は、舞台の上から「実は私のおふくろさんは今の文句を自分なりに、都々逸調でやるんですよ。ちょっと聞いて下さい」と、母に舞台にあがってもらい、私と肩を抱きよせながら都々逸調でやってもらいました。もともと歌の好きな母でしたので、

節廻しよろしくこなし、終ったところで私は「こんなに歌の好きなおばあちゃんなので、近くにNHKのど自慢大会でも来たら私は何としてもきつと連れて行ってあげたいと思います」と言いました。しかし実現しないまま、それからまもなく母は八十九才でなくなりました。

又つい最近逗子ビーチセンターでの友人の三味線昇伝会に招かれ、次の津軽山唄の民謡入り詩吟を吟ずる機会を得ました。

みちのくの津軽の里の鳩笛に
老いたる母の在りし日を憶う

イヤイデア十五ヤ、十五ヤ七はヤエ
十五になるから山、山登りヤエ……
岩木山雲は流れてはるかなる

笛の音恋し津軽山唄

舞台で吟じている途中、ふと、母がビーチセンターに通っていた頃、よく世話になったことのお手伝いのおばちゃんの姿が目に入り、無性に母のことが思い出され、涙がポロポロ出てきて、終りの方は吟が言葉になりませんでした。あゝおばあちゃんは歌が好きでよくこゝへ通ったんだな、亡くなってもう六年を過ぎたんだな、と思うと感無量で泣けてしまったのでした。

この二つの詩を吟ずる時、私はなぜか胸がいっぱいになり、涙がこぼれるのです。

明治天皇と詩吟

○この小文は元田進講録に依りました。読み易さと簡略を旨とした文に書き改めましたので、表現に不謹慎な箇所があるかと存じます。よろしくご容許下さい。

○この文の中で、
御上とは、明治天皇（御年二十六才）の御事。私とは、元田永孚侍講のこと。

明治十年十一月二十一日の夕、御上はご乗馬の後お茶亭の菊花の会にお出ましになり、私に共に見物するようお言葉を賜る。宴中ばに、御上は私を召され、御盃を賜り御食事中のお肉などもお箸でわざわざ分けて下さった。御上のお言葉は快活で、古今内外のお話を盛んに遊ばされ、私も何かとお答え申し上げ、大変愉快な時を過ぎて頂きました。そして酒宴が盛んになったころ、御上は「元田よ、出師の表を吟じなさい」と御声がかかった。早速でできるだけの声で吟じ始めたものの急のことであり、準備もしてなかったので十二句まで吟じた後は、もう苦しくなつてどうにも続かず、中絶してあとはお許しを乞うた。御上は、元田に茶を遣わせと侍従補に仰せあり、お煎

茶を頂戴しました。飲み終るや否や、御上は、も一題吟じよとお望みあり、それでは自作の「小楠公」でよろしいかお伺い致したところ、よろしいとお許しがあつた。こんどは自作なので「乃父の訓は骨に銘じ」から「今に至るまで生活す忠烈の魂」まで十八句、幸いに声もよく出て吟じられたので、御上から大変おほめいただきました。

御上はご機嫌よろしく、お盃を重ねられるので侍従が御帰還をお願い申し上げたところ心配無用とお言葉。しかし、時間も予定を経過したため、侍従が、菊花が銀燭に映えてとても見事であるので是非御覧遊ばすよう言上しました。すると御上は、「菊花は明年観ることができるが、元田の詩吟は、来年になつて今年のような声で聞けるかどうか。菊よりも元田の詩吟の方が大事」と仰せられたので、私はもとより、その場に居合わせた一同、御心の御深さ、御優しさに感激いたしました次第です。なお、その後においても、ご宴席の際などに、御上の御求めにより、何人かのお付きの方々によつて詩吟の朗詠が行われましたが、後々まで話題に上つたのは、以上申し上げた観菊の夜の情景が第一と評され、身に余る光栄に存ずるところであります。
(旧教本「小楠公」にこの話題あり)

自然と人生（十一月）

(月を帯ぶ白菊)

墨の如き樹影を浴びて、独り中庭の夜に立てば、月を帯ぶる白菊ほのかに香りて、花の月を囁やく声も聞く可き心地す。俯きて、其一枝を折らんとするに、しとど露にぬれたり。折れば月影ほろほるとこぼれぬ。

十一月十二日

碩心会50周年吟道大会

第二回準備委員会ひらかる

右会が10月30日(木)桜山下会館に於て行われ、大会予算・各係の準備進捗状況、其の他の報告がありました。

(入会)

769 南湖収二 横浜市磯子区洋光台一五九一〇一

(松和) (電)〇四五八三一一九七八七

770 横溝平八 藤沢市大庭湘南一三三三〇七三

(松和) (電)〇四六六一八八一〇四〇三

771 長谷川千恵子 葉山町堀内一二八五

(堀内F) (電)〇四六八一七五一一〇三一

772 平野レイ 逗子市沼間四一一八二一五

(平野) (電)〇四六八一七一一〇五七九